



平成31年2月7日

川西町議会議長

加藤 俊一 殿

川西町議会創生会

佐々木賢一

金子 一郎

淀 秀夫

伊藤 寿郎

行政視察調査報告について

川西町議会政務活動費の交付に関する施行規則の規定により、行政視察調査について別紙  
のとおり報告いたします。

# 行政視察調査報告書

1、期 日 平成30年8月3日

2、調査地 北海道別海町

3、調査事項 農業振興について

4、調査参加者

議員 佐々木賢一

議員 金子 一郎

議員 淀 秀夫

議員 伊藤 寿郎

5、調査地での説明者

北海道別海町議会議長

松原 政勝

産業振興部農政課長

小野 武史

同 主査

寺澤 淳司

議会事務局長

浦山 吉人

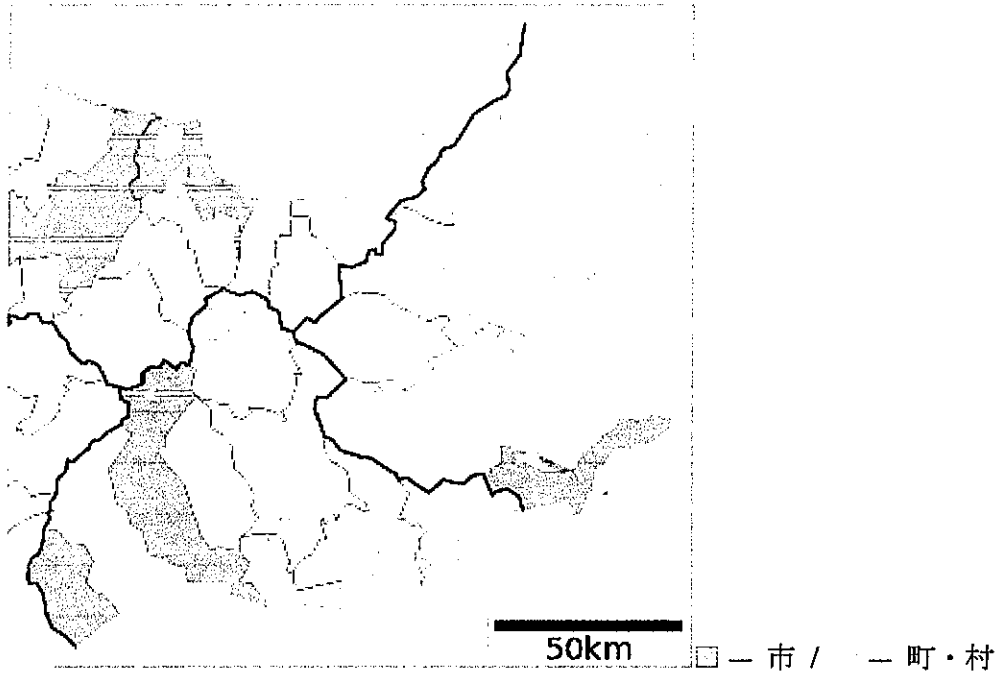
株式会社べつかい乳業興社専務

近岡 一詩

## 6、調査の概要

### (1) 北海道別海町の概要

#### 別海町の位置（根室管内の内）



#### ① 位置・地勢

別海町は、北海道の東部、根室管内の中央部に位置し、東西 61.4km、南北 44.3km に広がる町である。東はオホーツク海に面し、根室市、標津町、中標津町、標茶町、厚岸町、浜中町の 6 市町と接している。北海道らしい大平原が広がる牧歌的な風景が見られる一方、東部には日本最大の砂嘴である野付半島、南部には風蓮湖があり、3 市町（根室市、別海町、標津町）にまたがって野付風蓮道立自然公園を形成するなど、さまざまな景観を有し、自然条件に富んでいる。

また、野付水道を挟んで北方領土（国後島）を望む。面積 1319.63km<sup>2</sup> は「町」としては日本で 3 番目に広く（1 位は足寄郡足寄町、2 位は紋別郡遠軽町でいずれも北海道内）、「市町村」としては道内 6 位（北方領土内の留別村を含む）。その広大な町域は大半が起伏のゆるやかな丘陵地帯で、原野を切り開いて造られた牧場が町域ほぼ全般に広がり、集落は別海（べつかい）、中西別（なかにしべつ）、中春別（なかしゅんべつ）、西春別（にししゅんべつ）、西春別駅前、上春別（かみしゅんべつ）、上風連（かみふうれん）、本別海（ほんべつかい）、尾岱沼（おだいとう）など町の全域に点在している。町役場は町域中央やや東寄りの別海市街

に置かれているため、町の西部では標茶町の市街の方が近い地域がある。

南西部には防衛省陸上自衛隊別海駐屯地（航空自衛隊計根別飛行場）と矢白別演習場が置かれる。その面積は 17,192ha。沖縄県金武町県道 104 号線越えで行われていた砲撃訓練の移転を 1997 年（平成 9 年）から受け入れており、年に数回、アメリカ軍による大規模な射撃訓練が行われる。

## ② 歴史

最も開拓が早かったのは東部沿岸部で、主に漁業が行われていたが、明治 30 年代から内陸部への入植がはじまり、こちらでは畑作農業が中心におこなわれていた。開拓当初は沿岸の本別海地区（当時は「別海」と称した）に置かれていた役場も、内陸の入植者増加により、1933 年（昭和 8 年）に別海地区（当時は「西別」と称した）に移転している。昭和に入ると農業から酪農への転換が進み始めたが、土地の広大さゆえに開拓は遅れていた。そこで 1956 年（昭和 31 年）から世界銀行の融資を受け、根釧パイロットファーム方式が導入。機械による開拓がおこなわれ、1973 年（昭和 48 年）には新酪農村の建設に着手、現在の広大な酪農地帯を形成した。

## ③ 町名の由来

アイヌ語の「ペッカイ (pet-kai)」（川の・折れ目）「ペッカイエ (pet-kaye)」（川・を折る）に由来するとされる。現在の西別川が河口で曲がりくねる様子を表した名である。町名の読みについては古くから「べつかい」と「べっかい」が混在していたが、1971 年（昭和 46 年）の町政施行を機に「べつかい」で統一された。公的な文書や放送各局では「べつかい」の読みが使われ、道路案内標識上のローマ字表記も「Betsukai」となっている。しかし道道路線名中や、かつて存在した鉄道駅における「別海」は「べっかい」の読みであり、町内の本別海地区については読みが「ほんべっかい」となっている。このため読みはどちらが正しいか長期間にわたって議論になっていたが、2009 年（平成 21 年）3 月 10 日の町議会にて水沼猛町長が「べつかい」と「べっかい」の双方の読み方を認めると宣言し、町として公的表記を求められた場合は引き続き「べつかい」としている。

## (2) 別海町の農業振興について

### ① 現況

別海町は日本一の酪農の町といわれている。乳牛の飼養頭数は全国の7.6%を占め、生乳生産量は全国の6.4%を占めている。ともに市町村では日本一となっている。

	全国	北海道	都府県	別海町	全国に 占める 別海町 (%)	道内に 占める 別海町 (%)
乳牛飼養戸数	16,400	6,310	10,100	719	4.4	11.4
乳牛飼養頭数	1,323,000	779,400	543,700	100,900	7.6	13.0
1戸当たり頭数	80.7	123.5	53.8	140.5		
生乳生産量(千t)	7,394	3,923	3,471	476	6.4	12.1
1戸当たり(t)	451	622	344	662		

また、都道府県別牛乳生産量ランキングは以下のとおりである。

(2016年次、単位千t)

別海町の実績は第2位の栃木県を上回る。

順位		生産量	順位		生産量
1	北海道	3,923	9	宮城県	117
2	栃木県	330	10	長野県	103
3	群馬県	255	11	岡山県	94
4	熊本県	250	12	静岡県	91
5	岩手県	216	13	兵庫県	89
6	千葉県	214	47	和歌山県	5
7	愛知県	181			
8	茨城県	161		別海町	476

## ②調査内容と質疑応答

### ・株式会社べつかい乳業興社の設立経過について

大型酪農地帯を形成している別海町で生産される生乳から乳製品を製造する工場として創業した。また、牛乳の消費拡大と町民の健康増進、体力向上を図り、

安全で良質な入営品の提供とともに、別海ブランドのイメージ向上や食文化創造の拠点づくりの場として平成14年4月1日生産を開始した。

資本金は1億円で、別海町（53%）、JA道東あさひ、JA中春別、JA計根別が出資している。日本一の生産を誇る別海町には大手メーカーが進出し工場を稼働しているが、主にバターやチーズを生産しており、輸送が大変なことから牛乳の生産は行わない。そこで、地元出資の工場です学校給食牛乳を生産し、別海町を始め、釧路町、浜中町、弟子屈町、厚岸町、根室市など1市5町の小中学校の児童生徒に毎日飲んでもらっている。その数200mlパックで年間150万本になる。

興社の社長には別海町の副町長が就任、常勤の専務は大手メーカーを退職して就任した。従業員は36名となっている。

・べつかい乳業興社の事業内容は

酪農工場は、生乳生産量全国一の環境を生かした乳製品の開発・販売を40年以上前から続けている。

現在では、長い製造経験を生かし、ヨーグルトやチーズ、アイスクリームなど様々な種類の乳製品を全国に提供している。近年は、乳牛の生産者や流通過程を可視化する取り組みであるトレーサビリティシステムを導入し、「安心・安全」な製品づくりに努めている。

べつかい乳業興社全景



日本一の生乳生産量を誇る別海町。この街で数々の乳製品を製造・開発しているべっかい乳業興社は、牛乳にトレーサビリティを導入している日本で唯一の乳業メーカーである。ホームページ上で牛乳パックに印字されているパッケージ番号と賞味期限を入力すると、その牛乳がどこの牧場でいつ搾られ、どのように工場で加工されたのかが表示される。消費者の方々に安心と安全を提供するため、生産過程の情報を積極的に公開し、生産者の顔が見える良質な牛乳によって作られた乳製品は、全国各地に新たな「べっかい」ファンを生み出している。

売上高は5億2131万円（29年次）となっており、安定した売り上げを継続している。

・べっかい乳業興社の生産品は

べっかい乳業興社の生産品は加工品も含め多岐にわたる。

品目別売上高（単位千円）

	牛乳	ヨーグルト	チーズ	バター	アイス	ソフト	乳飲料	ギフト	その他	合計
29 売上	283451	11861	14105	19825	25381	25475	44823	61250	35147	521318
割合	54.4%	2.3%	2.7%	3.8%	4.9%	4.9%	8.6%	11.7%	6.7%	100%

大手メーカーが手掛けない牛乳の生産は、全体の54.4%を占めている。

・乳製品の輸出について

べっかい乳業興社では、農林水産省や貿易振興会、道庁の支援もあり、試行的に乳製品を海外に輸出している。

輸出実績は26年度289万円、27年度289万円、28年度41万円、29年度114万円となっている。

5年間の輸出実績は、ベトナム304万円（すべてアイスクリーム）、台湾186万円（アイスとソフト）、シンガポール134万円（アイスクリーム）、中国14万円（アイス）、香港12万円（発酵乳）。

海外バイヤーからは、以下のような反響があった。

- ①北海道産がほしい
- ②北海道のイメージが良い（美味しい、安心・安全、自然のまま）
- ③顧客は比較的富裕層
- ④味と色を濃くした方が人気（牛乳が主役）

⑤容量は多い方がよい（日本は少量個食）

⑥国際衛生基準が必要である。

⑦マネキン販売に出向くこと

輸出の悩みと課題は以下のように整理している。

①プラットホームがどこなのか（HOP、貿易振興会、道庁）

②距離（船便しかない）

③輸送手段（冷蔵、冷凍）

④異国のハンデキャップ。1) 法律（表示、賞味期限）

2) 食習慣（牛乳、乳製品を食べるか）

3) 宗教戒律（主にイスラム教）

4) 国内事情（輸入規制、保護か開放か）

・ディスカバー農山漁村の宝グランプリを受賞されたが

べつかい乳業興社は、農林水産省主催第3回（平成28年度）ディスカバー農山漁村の宝で、全国769件の応募の中から見事グランプリに輝いた。

評価を受けたのは、

○牛乳をはじめバター、チーズ等乳製品を製造、道内の和洋菓子店や飲料メーカー等と連携して新商品を開発した。

○平成25年度よりベトナムにアイスクリームを輸出

○乳製品加工研修施設を運営し、地域の牧場経営者等を対象にチーズづくり等の研修

・地域農業の担い手不足解消の対策について

地域農業の担い手不足は、毎年20戸程度が離農していることから、深刻である。そこで、関東、関西圏に出向き、農業の担い手を募集している。

酪農研修牧場は、新たに酪農経営を目指す方を対象に、必要な知識と技術を身につけるための実践的な研修施設として設置された。平成8年の設置以来、多くの修了生が町内で酪農業を営んでいる。

地域産業の担い手を育成するこの取り組みは、全国的に見ても珍しく、平成22年には国内の優れた農業事例を表彰する中央畜産会畜産大賞（地域畜産振興部門 最優秀賞）を受賞した。

3年間の研修、研修期間の給料補償などにより、これまで76組が就農してい



る。

## 7、視察を終えて

北海道の東端、根室管内にある別海町は日本一の酪農の町である。研修地に選定したのは、加工品の開発や輸出に取り組み、農林水産省主催の第3回（平成28年度）ディスカバー農山漁村の宝のグランプリを受賞していることから、その手法等を研修することにしたものである。

日本農業は、TPPの発効を控え、国際化と競争にさらされている。米、果物や加工品を輸出する取り組みがはじまり、特にアジアの富裕層を対象とした高品質、良食味、安心・安全な食品の輸出が行われているが、まだ端緒にすぎたばかりである。とはいいいながら、農産物輸出は日本の長年の願望でもあり、攻めの農業の切り札でもある。日本一の酪農王国であり、既に5年以上の実績がある別海町に学ぶところは大きい。何事も実践しないことには扉は開かない。今後の展開に期待は大きい。

また、別海町における担い手対策も大きな実績をあげている。酪農に夢を馳せる若者がいることは想像に難くない。翻って、稲作中心の川西町においてはどうか、町では地域おこし協力隊の制度を活用し、新たな担い手を育てたいとしている。今後の大きな課題だけに、別海町の事例は参考となる。

最後に、行政視察調査に当たって歓迎を頂き、懇切な説明を頂いた北海道別海町の皆さんに心から感謝を申し上げます。ありがとうございました。